

エジプトの政治史をひもとく

アラブの盟主エジプトの近現代の政治史、軍の役割を研究

アラビア語習得のため渡った
エジプトで現地の政治に興味

研究の道へと進んだ経緯を教えてください

大学ではアラビア語を専攻していましたが、なぜアラビア語を学ぶことにしたのか今となっては記憶があいまいですが、小学校の高学年頃、イスラームに興味を持ったのがきっかけだったように思います。アラビア語は文法がとても複雑で、母音を表記しないため読み取りが難しく、辞書引きできるようにするまで10年かかると言われています。しかも、当時は今

のように教材が豊富でないうえにアラビア語を使う機会もなく、なかなか身に付きませんでした。このまま大学4年間を過ごすのはもったいない、そう考えた私は2年生を終えた時点で大学を休学し、意を決して知り合いもつてもないエジプトに渡りました。

エジプトの首都カイロで生活を始めてみると、毎日が衝撃の連続でした。町は野犬だらけでお金のトラブルは日常茶飯事、女性へのセクシャルハラスメントも頻繁です。そんな中、特に衝撃を受けたのが貧富の差でした。また、当時のエジプトはイスラーム急進派による爆弾事件が

頻発し、私も身近なところで事件に遭遇したことがあります。なぜエジプトがこのような社会になってしまったのか――。その原因に関心を持ちました。

帰国後は学部の3、4年生を終えてから大学院へ。それ以降、エジプトの政治をテーマに研究と教育に携わっています。一時期、新しいことに挑戦してみたものの思いから、内戦中のシリアで日本大使館に勤務したこともありました。外交の現場に身を置き、これまでとは異なる視点からエジプトを見る機会に恵まれ、自身の研究がより深まったと感じています。

現在の研究テーマについてお聞かせください

エジプトの支配者層、
軍と政治の関係を研究

19世紀以降のエジプトの世襲議員について研究しています。1866年に西欧式の議会が開設されて以来、エジプトでは特定の家族の出身者が議席を占有する状態が続いています。その割合は徐々に減少してはいるものの、依然、有力者として各界で大きな影響力を持ち続けているのが現状です。エジプトでは、このような世襲議員を輩出する名家が全土に存



文学部教授 **鈴木 恵美**

東京外国語大学アラビア語学科卒業、東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了、博士(学術)。早稲田大学イスラーム地域研究機構研究院准教授、在シリア日本国大使館一等書記官、福岡女子大学准教授を経て2022年より現職。専門は近現代エジプト政治史、中東地域研究。

在しており、大半が大地主あるいは中規模地主の出身。そして、このような名家のかんりの割合が砂漠の民である遊牧民、いわゆるベドウィンをルーツとしています。土地に縛られることを良しとせず、王朝や国の境界線と無関係に暮らしてきた彼らが、どのような経緯で大地主となり、政治的、経済的、社会的な権力を掌握したのか。本来、ベドウィンであれば否定するはずのナショナリズムとの関係から研究しています。

また、ここ10年くらいで取り組んでいるもう一つのテーマが、エジプト軍と政治の関係についてです。2011年初頭からアラブ諸国で見られた民主化運動、いわゆる「アラブの春」以降の動乱で鍵を握るのが「軍」の存在であり、アラブ地域で最大規模の兵力を持つのがエジプト軍です。では、エジプト軍は政治の中でのどのような位置付けにあるのか、歴史的な見地から考察しています。

——エジプトの世襲議員や軍の研究を始めたきっかけを教えてください

近代以降のエジプトの政治や社会に関するアラビア語の書籍を読んでいると、政治体制や政権が変化しても、同じ苗字の有력政治家が登場することに気が付きます。政治家だけでなく、著名人全般に特定の苗字をもつ人物たちが登場するのです。エジプトの上層部を形成している彼らは、単に富と権力を独占するだけの集団ではなく、イギリス統治時代にはナ

ショナリズムの実践者であったこともわかってきました。では、彼らは一体どのような人々なのか。この疑問が、エジプトの支配者層の研究に踏み込むきっかけとなりました。

また、1952年に軍事クーデターで王制が倒れ共和制が導入されると、支配者の列に、新たに軍人が加わります。その頃からエジプト軍も研究対象となりました。エジプトの政治言説の中では、しばしば「誰がエジプトを支配しているのか」という問いが投げ掛けられます。私は、この問いに対する答えを模索し続けています。

——今後の研究の課題や展望があればお聞かせください

現在、エジプト中部地方を代表するベドウィンをルーツとする名家で、代々議員を輩出し、有名な政治家サアド・ザグルールを影で支えたとされるバースィル家を事例に研究を重ねています。コロナ禍以前は毎年この家の本拠地のあるエジプト中部の村を訪問し、家族に伝わる貴重な古文書を見せてもらい分析してきましたが、やはり私文書には限界があります。当然、国立文書館が所蔵する文書を調べることになるわけですが、近年なかなか日本人研究者に利用許可が下りないのが現状です。史料にアクセスし、それを読み込むのが歴史研究の基本ですから、この状態が早期に改善されることを望んでいます。

一方で、いずれはエジプトの食文化と政治を融合させた研究にも取り組んでみたいと考えています。たとえば、昔の支配者は何を好んで食べていたのかなど。趣味の範疇に入るものかもしれませんが、構想は尽きません。

「無駄」をいわず挑戦を歴史を学んで人生を豊かに

——学生を指導するうえで心掛けていることがあれば教えてください

せめて大学生でいる間は、成果や評価には直接結びつかない一見「無駄」だと思ふことをいとわないう話しています。最近よく思うのが、特定のテーマの課題を出す時、学生が調べるのは課題に直接関係することのみで、関連する物事にまで考察が至らないようということ。即座にコンパクトな答えを求める現代社会の影響かもしれませんが、大学時代の「無駄」は、実は「無駄」ではありません。今はその実感がなくても、何十年後に意味を持つことが多いものです。本来、教養とは、そのような「無駄」の積み重ねであり、教養はどんな状況にも対応できる力、総合力に結び付きます。学生のうちは即座に答えを得ようとせず、大いにもがき、葛藤することを楽しんでもらいたいと思っています。

——最後に、学生へのメッセージをお願いします

歴史は決して暗記科目ではありません。

歴史を知れば世の中の見方が変わり、人生が非常に豊かになります。たとえば世界を旅行してさまざまな建造物を見たとき、歴史を知っていれば、そこに人間の営みを有機的に感じ取れるようになります。また、現代が直面する課題に歴史が処方箋を提示してくれることもあり、歴史は多くのことを教えてくれます。是非、皆さんにも歴史を学ぶ楽しさを味わっていただきたいと思っています。

そして、何かに挑戦し、挑む精神をもつ社会人になってください。私の専門の西アジア、中東地域の社会と比較して、日本社会は人を引き算で評価することが多い印象ですが、これでは失敗やミスを恐れるあまり守りの姿勢になり、大きなことを成し遂げることはできません。是非チャレンジ精神でみずからの人生を切り開き、意義ある毎日を送ってほしいです。

【論文紹介】

『エジプト革命—軍とムスリム同胞団、そして若者たち』(中公新書)

2011年、約30年にわたるムバラク政権を、民衆によるエジプト革命で倒したエジプト。その後の2年半、民主化プロセスの中で軍、宗教勢力、革命勢力が巻き起こした権力闘争を、「軍」「ムスリム同胞団」「革命を起こした若者たち」の三者の視点から追う。

